桂南平話の入声調に関する一仮説

A Hypothesis about Entering Tone of Guinan Pinghua

植屋　高史

0．はじめに

平話とは中国広西チワン族自治区を中心に話される中国語方言の一つである。平話は桂南平話と桂北平話に下位分類されるが、本稿が取り扱うのは桂南平話の方である。

桂南平話は中国語方言の中でも最も声調数が多いことで知られている。普通話と呼ばれる中国の共通語が４声調であるのに対して、桂南平話は一般的に10声調を有する。典型的な声調体系は次のようである。

（高音域）　陰平｜陰上｜陰去｜上陰入／下陰入
（低音域）　陽平｜陽上｜陽去｜上陽入／下陽入

中古の平声、上声、去声、入声の四声が頭子音の清濁を条件として、高音域を用いる陰調と低音域を用いる陽調に分かれ、入声調はさらに二つの調類に分かれている。

筆者は植屋2007において『平话音韵研究』に収録される桂南平話の入声調の分調状況及び分調時の音韻的条件を調査した。分調の条件を探る試みには、他にも张晓勤・罗丹2011、王莉宁2011などがあり、徐々にその全貌が明らかになってきている。とりわけ王莉宁2011は平話と関係が深い粤方言全体にみられる韻攝分調の類型化を試みており有益である。ただ、入声調がどのような音韻的条件で分調したのかではなく、そもそも、かつては一つだった入声調がどのような段階を経て四つの入声調を持つに至ったのかについてはこれまでほとんど議論がなされてこなかったように思われる。

桂南平話が四つの入声調を持つといっても、その内訳は一様ではない。植屋2007においても指摘したように、多くの地点で、陰入、陽入の所属字が上下いずれか片方の調類に偏るという現象がみられる。またその際、33調及び22調の調類に偏る傾向がある。所属字をほとんど持たない調類は主に対応する漢字のない形態素や他方言及び少数民族言語からの借用に用いられるのだが、この現象はどのような意味を持つのか。

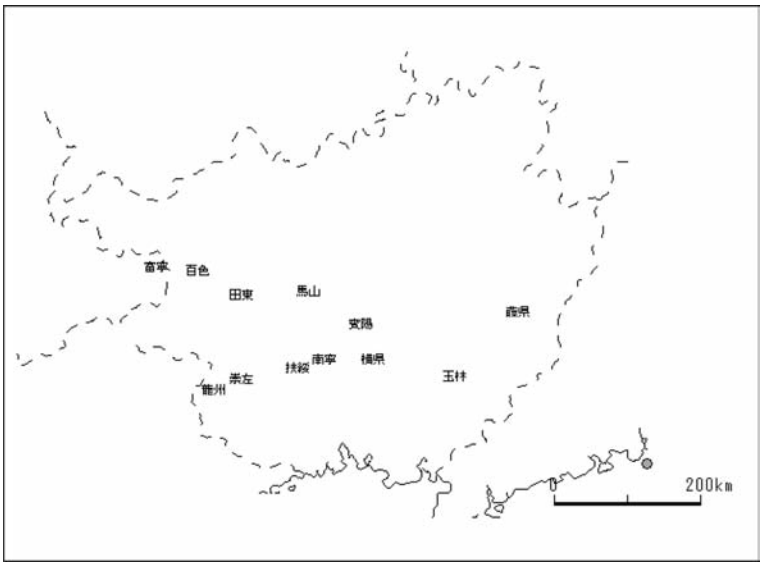
本稿は調値の入声と舒声における相配を糸口に、地理的分布も考慮に入れながら桂南平話全体の入声調の変遷過程を一つの仮説として提示したい。(1)

なお、本稿が利用するのは次の三つの資料である。

（１）『平话音韵研究』李连进 南宁 广西人民出版社 2000（pと略す）
（２）『广西汉语研究（上)』谢建猷 南宁 广西人民出版社 2007（gと略す）

（３）『粤语平话土话研究（第一编广西粤语、桂南平话部分）』上海 上海教育出版社 2009（y と略す）

（１）～（３）から得られる桂南平話のデータは、重複も含めて12地点27方言である。（地図１）



地図１　桂南平話地点地図

１．桂南平話の入声調類に見られる所属字の偏りについて

表１は各地点の調類と調値[(2)]を示したものである。括弧内の数字はその調類に所属する字の数を表す。表１から、多くの地点で陰入、陽入がともに二つの調類に分かれ四つの入声調を有していることが確認できる。

ここで注意が必要なのは、入声調が四つあるといっても、それぞれの地点で各調類における所属字の数にばらつきがあることである。表２は『平话音韵研究』の調類とそれぞれの所属字の数を調べて表にまとめたものである。（上下陰入、上下陽入で片方に所属字が偏っている箇所の背景に色付けしてある）

表１　桂南平話の声調体系とその調値

河川	地点	言語名	資料	平声		上声		去声		入声			
				陰平	陽平	陰上	陽上	陰去	陽去	上陰入	下陰入	上陽入	下陽入
	富寧	剥　隘　話	p	44	31	33	21	13	22	55	33	22	35
右江	百色	那　畢　話	p	54	42	33	13	35	22	33	55	31	22
		那畢平話	g	53	31	33	23	45	22	55	33	22	23
		那畢平話	y	53	32	33	24	343	21	3	5	23	11
	田東	林　逢　話	p	54	41	33	13	35	22	33	55	13	22
		庶　園　話	y	55	42	33	13	35	322	5	3	23	21
左江	龍州	上　龍　話	p	55	31	33	53	35	21	33	35	55	11
	崇左	新和庶園話	y	55	31	33	21	35	22	(1)55(2)31(3)33		22	21
	扶綏	龍　頭　話	p	53	21	33	11	35	13	33	35	22	13
		龍頭平話	g	55	31	33	11	35	13	55	33	13	22
		城廂平話	y	355	33	53		24	22	3		2	
邕江	南寧	亭　子　話	p	41	21	33	13	55	223	55	33	24	22
		亭子平話	y	53	21	33	24	55	22	3		23	2
		沙井平話	g	53	31	33	23	45	22	55	33	22	23
		四塘平話	y	55	21	33	24	35	22	5	3	24	2
		石埠平話	y	55	31	33	24	35	22	3		(1)24(2)2(3)5	
	馬上	喬　梨　話	p	55	41	33	22	35	13	33	55	22	35
	賓陽	蘆　墟　話	p	34	213	33	22	55	42	55	33	42	11
		王霊平話	y	35	213	33	22	55	21	5	3	42	
		王霊復興平話	y	35	213	33	22	55	42	5	3	2	
		新橋平話	y	24	213	33	22	55	41	5	3	2	
		新橋賓陽話	g	34	213	44	33	54	42	5	3	21	
		大橋平話	y	24	213	33	22	55	41	5	3	2	
		黎塘客話	y	35	213	33	22	55	21	5	3	2	
邕江	横県	横　州　話	p	55	25	33	13	53	22	55	33	22	35
潯江	藤県	藤　城　話	p	53	212	33	35	434	22	55	33	22	
	玉林	富　錦　話	p	54	31	33	13	52	22	55	33	13	22

所属字の有無は次のとおり。括弧内の記号は地図上の記号を表す。

陰入：偏りあり（A）　富寧、百色、田東、龍州、扶綏、南寧、馬山

　　偏りなし（B）　賓陽、横県、藤県、玉林

陽入：偏りあり（A）　富寧、百色、田東、龍州、馬山、玉林

　　偏りなし（B）　扶綏、南寧、賓陽、横県

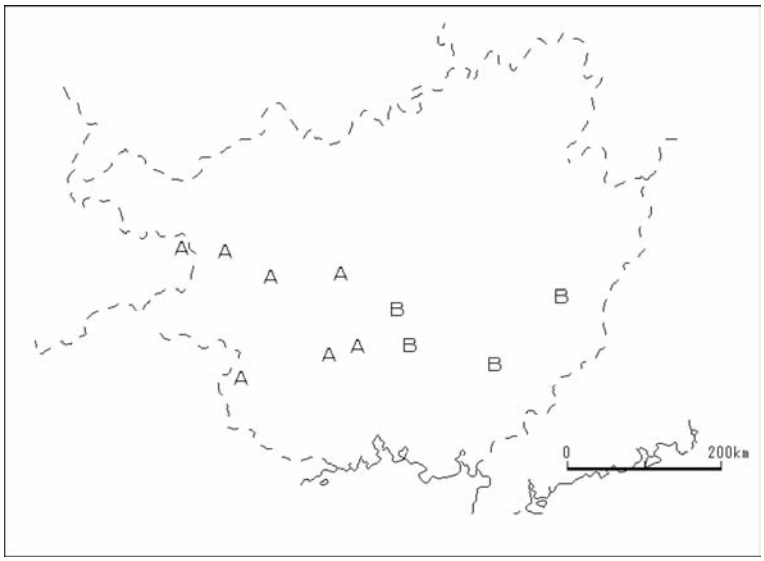
表２　調値と所属字の数

河川	地点	言語名	入　声			
			上陰入	下陰入	上陽入	下陽入
	富寧	剥　隘　話	55（ 35）	33（220）	22（171）	35（ 14）
右江	百色	那　畢　話	33（357）	55（ 3）	31（ 28）	22（127）
	田東	林　逢　話	33（374）	55（ 3）	13（ 25）	22（141）
左江	龍州	上　龍　話	33（261）	35（ 8）	55（ 7）	11（176）
	扶綏	龍　頭　話	33（298）	35（ 9）	22（138）	13（ 81）
邕江	南寧	亭　子　話	55（ 7）	33（310）	24（114）	22（ 91）
	馬上	喬　利　話	33（305）	55（ 8）	22（157）	35（ 7）
	賓陽	蘆　墟　話	55（146）	33（161）	42（106）	11（ 96）
邕江	横県	横　州　話	55（155）	33（169）	22（136）	35（ 79）
潯江	藤県	藤　城　話	55（209）	33（108）	22（224）	
	玉林	富　錦　話	55（129）	33（173）	13（ 4）	22（186）

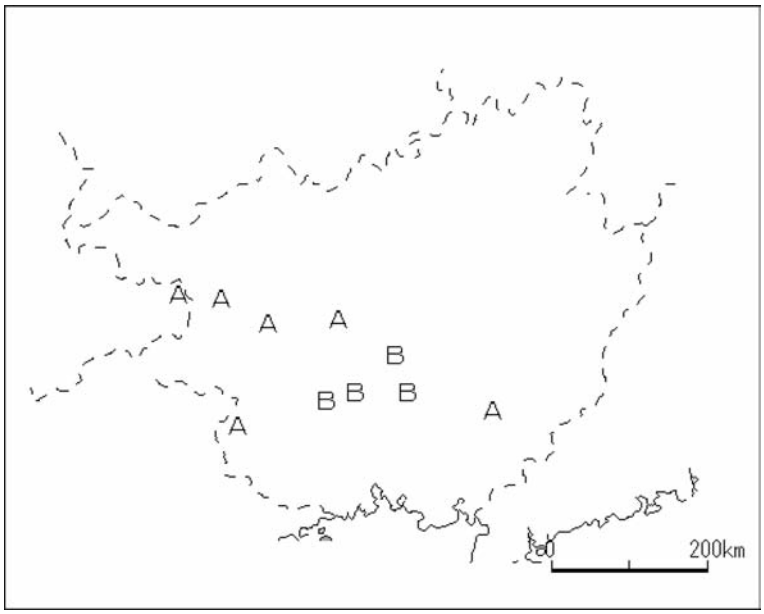
これを地図上に表現したのが地図２と地図３である。陰調における偏りの有無は東西対立をなす。また、陽調においては玉林のみが離れて分布している。

語彙項目とは異なり、音声現象については、安易に地理的分布から言語変化の方向性を決定するわけにはいかないが、示唆的ではある。現在は偏りがない地域も歴史的には偏りがあり、ある時期に革新が起こり、偏りがなくなった可能性がある。

さらにここで注目すべきは、植屋2007でも指摘したように所属字の偏りには、陰入ならば33調に、陽入ならば22調に偏る傾向があるということである。筆者はここから入声が分調していく過程で、33調と22調という二つの入声調を有する段階があったと考える。桂南平話の中には陰入や陽入が分調していない地点もあるが、その場合、ほとんどが33調と22調になっていることもその裏付けとなる。



地図２　桂南平話の陰入調における偏りの有無



地図３　桂南平話の陽入調における偏りの有無

３．桂南平話にみられる入声と舒声の相配について

桂南平話の調類と調値の特徴について、覃远雄2004は以下のように指摘している。

（１）　桂南平話における陰上のほとんどが中平調であること。これは桂北平話にも共通する特徴である。

（２）　入声と舒声が相配していること。[3]心圩、田東、邕寧、亭子、横県などでは下陰入、下陽入が陰上、陽去と調値が同じになっている。これは南寧、玉林、広州の粤語においてもみられる現象である。

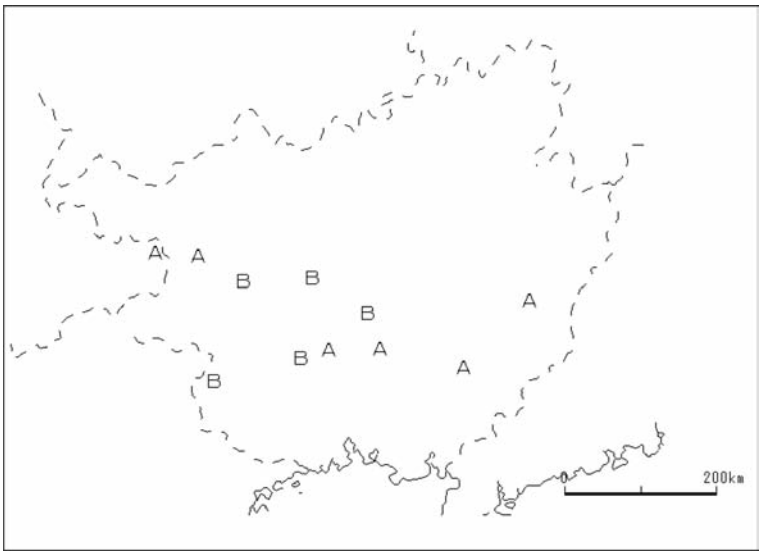
それでは、入声調と舒声（とくに陰上と陽去）との相配について見てみよう。

表１によると、陰上は扶綏で調値が53調になっていることを除けば、中平調の33調（一地点のみ44調）になっている。陽去については、陰上ほどではないが22調が優勢である。

陰上、陽去と入声の間の相配関係は次のとおり。（地図４）

相配がみられる　（A）　富寧、百色、南寧、横県、藤県、玉林

相配がみられない（B）　田東、龍州、崇左、扶綏、馬山、賓陽



地図４　入声と舒声の相配状況

分布特徴を見ると、富寧、百色といった北西部と中心部の南寧、東部の横県、藤県において相配がみられ、その中間地域では相配がみられない。所属字の偏りの有無同様、音声現象に関しては、地理的分布は言語変化の方向性を証明する決定打とはならないが、やはり示唆的な意味を持つと考える。つまり、歴史的にはすべての地域で、入声調は陰上陽去との間に相配関係を持っていたが、一部地域で革新的な変化が起こり、相配関係が崩れたのであろう。(4)

４．陰入の分調について

次に考えなければならないは陰入の分調についてである。先行研究の多くは、陰入が十六攝の内転外転といった韻攝を条件に上陰入と下陰入に分かれると説明しているが、上述したように、二つの陰入を有しているだけで、実際はほとんど所属字を持たない地点が多くある。この所属字が偏っているという現象をどう説明すればよいだろうか。二つの可能性がありうる。

可能性１：すべての地点で内外転による分調がみられたが、後に一方の調類に偏った。

可能性２：すべての地点で一方の調類に偏りがあり、後から内外転を条件に一部の字が他方に移った。

つまり、韻攝分調が起こったから二つの調類を有することになったのか、もともと二つの調類があったところで韻攝分調が起こったのか、ということである。

筆者は後者の方がより合理的な説明がつくと考えている。この問題を考える際に参考になるのは、表１にみられる崇左新和庶園話の例である。この地点では一見、陰入が三つの調類に分かれているように見えるが、55調は白話からの借用音、31調は口語的な発音や文

字のない形態素が所属しており、実質は33調が主流なのだという。つまり、55調と31調は調類の枠組みにすぎず、ほとんど漢字が属さない。同じような状況が他の地点でも通時的変遷の一局面として存在したと考えられないだろうか。

つまり、入声調が陰入（33調）と陽入（22調）の二調類だったところに、言語接触によって他方言（言語）から新しく高平調である55調の調類がもたらされ声調体系に組み込まれた。この段階では所属字は当然片方の旧来の調類に偏っている。現在に至るまで、そのまま専ら他方言や少数民族言語からの借用字が所属する調類として用いる地点もあれば、内外転を条件に一部の文字を新しい55調に移して調類の負担を減らす地点も出てきた。つまり、内外転によって新しい調類が生まれたのではなく、新しく獲得した調類（音域）を有効活用する一つの方策として内外転の違いが働いたと考えるのである。

5．陽入の分調と入声調分調の前後関係について

それでは陰入と陽入ではどちらの分調が先に起こったのだろうか。平話と関係が深いとされる粤語の多くが上陰入、下（中）陰入という三つの入声を持つことから、桂南平話でも陰入が先に分かれたと予想されるが、それは桂南平話の調値の特徴からも説明されうると考える。

表１を見ると、四つの入声調がすべて平板調である地点はない。それは音の発声及び識別が困難であるからだろう。よって最低でも四つの調類のうち一つは上昇調もしくは下降調が存在する。その大多数は陽入においてみられ、調値はまちまちである。これは変遷の過程で、上陰入55調、下陰入33調、陽入22調という三つの平板調の安定した三調類の段階が存在し、後からその隙間に入り込むように新しい陽入調がもたらされたからではないか。

新たな言語接触によって、陽入がもう一つの調類を獲得する。陰入に外から新しく55調が入ってきた初期段階と同じように、初めはほとんど所属字を持たないが、新しい調類として認知されると積極的に活用する地点も現れてくる。その際に全濁次濁を条件にする地点もあれば、内外転を条件にする地点もある。

6．まとめ

以上を踏まえて、本稿では、一つの仮説として、桂南平話において次の四つの段階が存在したと考える。

第一段階	第二段階	第三段階	第四段階
入声	陰入（33）	陰入１（55）	陰入１（55）
		陰入２（33）	陰入２（33）
	陽入（22）	陽入　（22）	陽入１（22）
			陽入２

かつては一つであった入声調は、頭子音の清濁を条件に陰入（33調）と陽入（22調）に分調した。次に、言語接触によって陰入に新しく55調が声調体系に組み込まれ、地点によっては一部の所属字が新しい調類に移った。最後に、新たな言語接触によって陽入に新しい

調類がもたらされ、地点によっては一部の字が新しい調類に移った。

中国語の方言調査は『方言調査字表』などを用いて漢字の字音調査から始めるのが常道となっている。しかし、広西チワン族自治区は多民族居住区であり、実地調査していると漢字を持たない形態素が大量に現れてくる。本稿は先行研究のように分調の音韻的条件を探るのではなく、調値や入声と舒声の相配関係、地理的な分布などを考慮しながら、桂南平話の現在の四つの入声調がどのように成立したのかを考察してみた。しかし、これは一つの仮定に過ぎない。陰入と陽入の分調を言語接触によって外からもたらされた言語変化と考えているわけだが、その実態がどのようなものであるのかは筆者にもまだよくわかっていない。周辺言語である粤語、桂北平話、土話及び少数民族言語との関係性など考慮しなければいけない問題がたくさんあり、今後、自らも方言調査を行いながら、補足修正していきたいと考えている。

注

（1） 桂南平話の声調研究に関しては覃远雄2004、张晓勤・罗丹2011、王莉宁2011などがある。

（2） 中国語の調値は5度制表されるのが一般的である。最高点を5、最低点を1として様々な調値を示す。例えば共通語の四つの声調は、第一声（55）、第二声（35）、第三声（214）、第四声（51）のように表す。また調形には「平板調」「上昇調」「下降調」などがあり、高さに違いがある際は「高平調」「中平調」「低平調」のように区別する。

（3） 舒声とは入声以外の平声、上声、去声を指す。相配とは入声の調値と舒声の調値が同じであったり、似ていたりすることをいう。

（4） 去声の調値は、22調の低平調以外に下降調や上昇調が観察される。声調調値の変化については官話方言の調値を扱った平山1984の環流説がよく知られている。調値の具体的な変遷過程については稿を改めて検討したい。

参考文献

平山久雄1984.「官話方言声調調値の系統分類―河北省方言を例として―」,『言語研究』86：33-53。

覃远雄2004.「桂南平话的声调及其演变」,『方言』3 ：212-225。

植屋高史2007.「桂南平話における入声字の分調について」, 佐藤進教授還暦記念中国語学論集刊行会編『佐藤進教授還暦記念中国語学論集』：275-284。

张晓勤・罗丹2011.「桂南平话入声的演变」,『桂林师范高等专科学校学报』, 25-1：25-32。

王莉宁2011.「粤语中的元音分调现象」,『中国语文』1 ：71-79。